

## **あなたの家を思う熱心**

ヨハネの福音書 2章 13-22節

### **はじめに**

毎月第一週の説教は、「ヨハネの福音書」からお話しています。今日の聖書箇所には、イエス様がエルサレムの神殿に行かれて、その神殿の中で、細縄で作ったむちで、羊も牛もみな追い出し、両替人の金を散らして、その台を倒したという出来事が書かれています。

イエス様という方は、病人を癒やし、貧しい者たちを顧み、社会的に軽蔑されている罪人と呼ばれる人たちと食事をされるような方でした。またイエス様の周りにはいつも群衆が集まって来て、彼らに神の国の話をされました。子どもたちをも抱きかかえて祝福し、十字架で殺される時も、全く無抵抗でありました。

しかし今日の聖書箇所のイエス様は、少し暴力的です。細縄で作ったむちを神殿で振り回しておられるのです。これはイエス様にとって、非常に珍しいことです。なぜイエス様は、こんなことをなさったのでしょうか。

### **1. 過越の祭り**

イエス様がこのことをなさったのは、13節にあるように、「ユダヤ人の過越の祭りが近づいた」頃でした。この祭りは、ユダヤ人の三大祭りの一つで、イスラエルの民がエジプトの奴隷状態から解放された出エジプトの出来事を記念する祭りです。この祭りは、毎年一回春に行われていました。この祭りが、「過越の祭り」と呼ばれているのは、出エジプトの時、イスラエルの民は、傷のない子羊を屠り、その血を家の二本の門柱と鴨居に塗ったのです。すると神様は、その血が塗ってある家には、裁きと災いを下さず、過ぎ越されたのです。

ちなみに「ヨハネの福音書」において、過越の祭りは、3回出てきます（2：13、6：4、11：55）。過越の祭りは、一年に一度行われていましたから、イエス様の宣教の働きは、三年間であったと推測されます。つまり、イエス様の宣教の働きの中に、三回過越の祭りがあったので、イエス様の宣教の働きは三年間であったということです。イエス様が宣教の働きを始められたのは、およそ三十歳（ルカ3：23）でしたから、イエス様はおそらく、三十歳から三年間、宣教の働きをされ、三十三歳の時に十字架で死なれ、復活し、天に昇られたと推測されます。

### **2. イエスの宮清め**

さて、イエス様は、過越の祭りの時期に、エルサレム神殿に来られると、神殿の中で、「牛や羊や鳩を売っている者たちと、座って両替をしている者たち」を見ると、細縄のむちで、羊も牛

もみな神殿から追い出し、両替人の金を散らして、その台を倒して、「**それをここから持って行け。わたしの父の家を商売の家にしてはならない**」と言われたのです。

イエス様はなぜこんなことをされたのでしょうか。神殿の中で、いけにえとして献げる牛や羊や鳩を売ることは、律法で命じられていることでした（申命記 14：24-26）。過越の祭りは、年に一度の祭りですから、遠い各地からユダヤ人たちが集まって来るのです。その時に、遠い各地から来る人は、いけにえとして献げる牛や羊や鳩を連れてくることはできません。ですから、エルサレム神殿でいけにえの動物をお金で買うのです。しかも、いけにえとして献げる動物は、傷のないもの、また病気に罹っていないものなどの条件が厳しいので（レビ記 22：17-25）、自分たちが連れてくるものより、エルサレム神殿でよく検査された動物を買うほうが安心だったのです。ですから多くのユダヤ人が、エルサレム神殿で、動物のいけにえをお金で買ったのです。

しかしエルサレム神殿で使うお金は、ユダヤ人の「シェケル」という貨幣を使わなければならないという律法がありました（出エジプト 30：13）。当時のユダヤは、ローマ帝国に支配されていましたから、ユダヤ人たちは通常の生活ではローマの貨幣を用いていたのでしょう。ですから、献金をする、また動物を買う時に、ローマの貨幣をユダヤ人の貨幣「シェケル」に変えるために、両替人が必要だったのです。

ですから、神殿の中で、動物のいけにえを買うこと、お金を両替することは、律法で命じられていることであり、神殿での礼拝に必要なことであつたのです。ではなぜイエス様は、神殿の中で細縄のむちを振り回されたのでしょうか。旧約聖書の一番最後の書物であるマラキ 3：1 に、こういう言葉があります。「**あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、彼が来る**」。ここには、「主が突然、神殿に来る」と預言されています。またマラキ書のひとつ前の書物であるゼカリヤ 14：21 には、こう書かれています。「**その日、万軍の主の宮にはもう商人がいなくなる**」。ここには、その日、つまり「メシア（救い主）がやって来る時には、神殿に商人がいなくなる」と預言されています。イエス様が神殿で細縄のむちを振り回して、商人を追い出されたのは、これらの預言の成就であると言えます。

しかしそうであっても、なぜイエス様がこのようなことをされるのかを考えなければなりません。イエス様は 16 節で、エルサレム神殿を「わたしの父の家」と言っています。つまりイエス様は、エルサレム神殿は「神の家」であって、ご自分は「神の子」だと言っておられるのです。そして、その「神の子」の権限によって、商人たちを追い出しているのだと言っておられるのです。イエス様は、なぜ商人たちを神殿から追い出されたのでしょうか。それは、御自身によって、動物のいけにえによる礼拝を終わらせるためです。つまり旧約時代の礼拝のあり方を終わらせるためです。イエス様ご自身が、旧約時代の礼拝のあり方を終わらせ、新約時代の新しい礼拝のあり方を始めようと言われたのです。

では、新約時代の新しい礼拝のあり方とは、どのようなものなのでしょうか。17 節に、「**弟子たちは、『あなたの家を思う熱心が私を食い尽くす』と書いてあるのを思い出した**」とあります

が、これは詩篇 69：9 の引用です。イエス様は、「神の家」つまり、神殿での礼拝について情熱をもっておられました。しかしそのために、結果的に自分を「食い尽くす」ことになったというのです。マルコ 11：18 を見ると、イエス様がエルサレム神殿で細縄のむちを振り回して商人たちを追い出された後、祭司長たちや律法学者たちが、「**どのようにしてイエスを殺そうかと相談した**」とあります。つまり、イエス様がエルサレム神殿で細縄のむちを振り回して商人たちを追い出した結果、祭司長たちや律法学者たちの怒りを買って、イエス様は十字架で殺されることになったというのです。

イエス様は、ただ商人たちを追い出して、動物のいけにえによる礼拝を終わらせて、新しい礼拝のあり方を始めようとしたのではありません。動物のいけにえに代わって、自分をいけにえとして献げることを通して、新しい礼拝のあり方を始めようとしたのです。神の子の命を、ただ一度いけにとして献げて、もう二度と動物のいけにえを献げなくてもよい、新しい礼拝のあり方を始めようとしたのです。動物のいけにえよりも、もっと確かに私たちの罪を贖う、神の子の命をいけにえとして献げてくださったのです。

だからこそ今、私たちは、動物のいけにえを献げずに、神様を礼拝することができるのです。聖なる神様を礼拝するためには、私たちの罪の贖いをするいけにえが必要です。だからこそ旧約時代には、動物のいけにえが必要でした。しかしイエス様が十字架で私たちの罪を贖ってくださった今は、私たちは動物のいけにえを献げる必要はなくなりました。しかし、私たちの罪がなくなったわけではありません。私たちが今、動物のいけにえを献げずに、神様を礼拝できるのは、イエス様の十字架の犠牲があるからです。私たちの礼拝は、イエス様の十字架の犠牲の上に成り立っているのです。

では私たちは今、礼拝の時に何のいけにえを献げなくてもよいのでしょうか。動物のいけにえは献げる必要はありません。しかし私たちに、今でも礼拝で献げるべきいけにえがあります。その一つは、「**賛美のいけにえ**」です。ヘブル 13：15 には、「**私たちはイエスを通して、賛美のいけにえ、御名をたたえる唇の果実を、絶えず神にささげようではありませんか**」とあります。第二に、「**悔い改めた心**」です。詩篇 51：17 には、「**神へのいけにえは、砕かれた霊。打たれ、砕かれた心。神よ、あなたはそれを蔑まれません**」とあります。第三に、「**自分自身**」です。ローマ 12：1 には、「**あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です**」とあります。

イエス様は、私たちの罪のために、御自身をいけにえとして献げてくださいました。ですから私たちに、自分の罪の赦しのために、献げるものは何もありません。私たちに、イエス様の罪の贖いに感謝して、賛美と悔い改めの心を神様に献げ、自分自身のすべてを神様に献げることです。それこそが、新約時代の新しい礼拝のあり方なのです。

### 3. 神の子としてのしるし

さて、イエス様が細縄のむちを振り回して、商人たちを追い出したのを見たユダヤ人たちは、イエス様にこう言います。「**こんなことをするからには、どんなしるしを見せてくれるのか**」。イ

イエスは、神殿を「わたしの父の家」と言って、ご自身を「神の子」と言われました。ユダヤ人たちは、「それなら、あなたが神の子であるしるしを見せてみろ」と言うのです。

それに対してイエスは 19 節で、「この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる」と言われました。ユダヤ人たちは、四十六年もかかって建てた神殿を、三日で建てるなんてあり得ないとあざ笑います。しかしイエスは、21 節にあるように、エルサレム神殿のことではなく、「ご自分のからだという神殿について語られた」のでした。

つまりイエスは、「わたしのからだを壊してみなさい。そうすれば、わたしは三日でそれをよみがえらせる」と言われたのです。イエスはここで、御自分の十字架と復活について語られているのです。イエスが「神の子」とあることのしるし、それは、私たちの罪のために十字架で死なれ、三日目に死からよみがえられたことです。ローマ 1 : 4 には、「**聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです**」とあります。イエスの十字架と復活、特に復活こそ、イエスが「神の子」とあるということを公に示された御業だと言うのです。

22 節に、「**それで、イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われたことを思い起こして、聖書とイエスが言われたことばを信じた**」とあります。弟子たちは、イエスが復活するまで、聖書とイエスが言われる言葉を信じられなかったのです。イエスが本当に死者の中から復活したと分かった時、聖書とイエスの言葉を信じられるようになったのです。

教会に初めて来た人、あるいは通って来て間もない人は、聖書の言葉、イエスの言葉がなかなか信じられません。特に聖書の中に出てくる奇跡的な出来事は、信じられません。しかし、イエスが「神の子」とあると信じる事ができれば、聖書の中に出てくる奇跡的な出来事も、聖書の中に出てくる難解な教えも理解し、信じられるようになるのです。聖書を理解する鍵は、「イエスが神の子である」という視点で読んでいくことです。

## **おわりに**

最後に、イエスが神殿を「ご自分のからだ」と表現されたことに注目して終わらしましょう。イエスは、神殿を「ご自分のからだ」と言われ、それを壊してみれば、三日でよみがえらせると言われました。神殿は礼拝の場でした。新約時代の礼拝の場は、神殿ではなく、「イエスのからだ」「キリストのからだ」である教会です。教会こそ、私たちの礼拝の場です。教会を「キリストのからだ」と言う時、それは復活された「キリストのからだ」です。

私たちは、毎週日曜日に、集まって礼拝を献げます。それは、イエスが復活されたのが、日曜日であったからです。イエスが復活された日曜日に、復活された「キリストのからだ」が集まるのが、礼拝なのです。イエスが復活された日曜日の礼拝には、復活された「キリストのからだ」が集まらなければならないのです。「キリストのからだ」が欠けてはならないのです。私たちクリスチャンは、イエスを信じる時、「キリストのからだ」の一部となります。復活の日である日曜日に、復活された「キリストのからだ」が集まり、キリストは

確かに復活されたことを世に示していかなければなりません。その時に、キリストのからだの一部が欠けてはおかしくなるのです。今日は、「キリストのからだ」の右手がない、左足がない、ではおかしくなるのです。私たち「キリストのからだ」は、毎週日曜日ごとに、復活の「キリストのからだ」を目に見える形で示し、キリストは確かに復活されたことを示していかなければならないのです。これが、イエス様が復活された日曜日の礼拝に、私たちが集まることの意味ではないでしょうか。

天におられる私たちの父なる神様。

今、私たちがあなたを礼拝することができるのは、イエス様がご自身の命をいけにえとして十字架で献げてくださったからです。私たちは、あまりにも罪で汚れていて、何の犠牲もなしに、あなたを礼拝することはできません。イエス様の十字架を心より感謝します。今私たちは、賛美と悔い改めた心をいけにえとして献げます。また自分自身のすべてをあなたに献げます。どうか、イエス様のように、あなたを礼拝することにおいて熱心であることができますように。

キリストのからだの一部とされた私たち一人ひとは、毎週日曜日の復活の日に、復活された「キリストのからだ」を目に見える形で示していけますように。どうか私たち一人ひとりが「キリストのからだ」を表すことにおいても熱心でありますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。